

Title	おとぎ話の現在：齊藤洋『ペンギンハウスのメリークリスマス』をめぐって
Author	大澤, 慶子
Citation	人文研究. 54 卷 7 号, p.87-98.
Issue Date	2002-03
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学院文学研究科
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

おとぎ話の現在——斉藤洋『ペンギンハウスの メリークリスマス』をめぐって

大澤慶子

はじめに

『ペンギンハウスのメリークリスマス』は1989年11月18日に講談社から初版が発行されており、斉藤洋の初期代表作のひとつである。彼がデビュー後に受賞した「路傍の石幼少年文学賞」の対象作のひとつともなった。

筆者はこれまでに、斉藤洋の『ドローセルマイヤーの人形劇場』と『テオバルトの騎士道入門』とを、主としてドイツ文学とのかかわりから「教養小説」という視点を設定して分析を試みた。¹この二作品は、読者の年齢層を指定するものではなく、とくに『ドローセルマイヤーの人形劇場』は内容的に青年向きと書いていいような小説である。「教養小説」の視点から考察するのにふさわしい作品だと言えよう。

しかし今回考察の対象とする『ペンギンハウスのメリークリスマス』は、だいぶ趣を異にしている。これは講談社の「わくわくライブラリー」の一環であって、「小学初級から」の指定があり、「全国学校図書館協議会・選定図書」「日本図書館協会・選定図書」に選ばれている。要するに、児童向けの作品として認定されているのである。児童向けの物語が教養小説であっても全く不都合ではないし、また実際にそういう作品も存在するが、『ペンギンハウスのメリークリスマス』(以後『ペンギンハウス』と略称する)には、そのストーリーや人物像の特性からして「教養小説」とは別の視点を設定するのが適当であると考え、「メルヒェン」「おとぎ話」という観点から考察してみることにした。その理由は後述するが、『ペンギンハウス』がグリムの童話集にある作品と共通のモチーフを持っていることや、登場人物の性格がメルヒェン的であることなどによる。

1. 『ペンギンハウスのメリークリスマス』の梗概

これからの考察を判りやすくするために、まず物語の粗筋を紹介しておこう。

本文は93ページから成っているが、右側のページはすべて伊東寛による挿絵であり、正味46ページの本文にも多くのイラストがあるので、長い作品ではない。物語は回想の形式をとっている。

にぎやかな、みなと町。

かいがんどおりに、ペンギンハウスという、小さなレストランがあります。

カウンターに、6人しかすわれない、小さなレストラン。

おじいさんが、ひとりでやってる、古いレストラン。(2ページ)²

舞台がどこであるのか、また時代がいつなのか、ということについては一切言及されない。日本なのか、外国なのか、南半球なのか、北半球なのか、まったく不明である。「ペンギンハウス」という店の名前は出てくるが、登場人物の固有名詞はない。こうした点はいかにもおとぎ話的である。

言及されていないということは、読者の想像に任されていると考えてよい。日本で育った子どもや大人がこの物語を読むなら、自然に日本のどこかのちいさな港町を想像するだろう。日本のちいさな港町が舞台であるとするなら、時代もまた、第二次大戦後しばらく経った経済の高度成長期を連想するだろう。それは、次のような言及があるからである。

それから、めずらしく、おきゃくさんがこむ日がつづきました。みせのしゅじんは、おおいそがしです。

ちょうど、みなとを大きくする工事がはじまって、工事をする人がいっぱいくるようになったせいかもしれません。(26ページ)

しかし、これは少しあとの話である。物語の導入部は、一般的なクリスマスの描写から始まり、季節感だけははっきりと示されている。クリスマスの季節になると、そのちいさなレストランの奥の席に、「ほんもののペンギンと、おなじくらいの大きさの、ペンギンのおきものが、カウンターの上に、じんどります。」(6ページ)

ずいぶんおもたい、おきものです。

でも、手でさわると、せとものや、てつじゃないことがわかります。そんなつめたい感じじゃなくて、もうちよつと、やわらかいような、あったかいような……。

きれでできた、ぬいぐるみじゃないかって？

いいえ、ちがいます。ぬいぐるみじゃありません。おもたいおきものです。(6ページ)

12月には一人分の席がペンギンに取られてしまうが、お客はだれひとりとして文句をいわない。それは、「みせのしゅじんが、そのペンギンを、とつてもだいじにしていることを、みんな、知っているからです。/ それに、ペンギンがそばにいと、なんとなく、しあわせな気分になれるからです。」(6ページ)

そのペンギンの席は「サンタクロースのせき」と呼ばれている。

ここまでが導入部である。なぜ狭いレストランに12月になるとペンギンが陣取るのか。実物大の「おもたいおきもの」だが、なんでできているかわからない不思議なペンギンはどこからきたのか。そのペンギンが占める席は、なぜ「サンタクロースのせき」と呼ばれるのか。こうした疑問を読者に提示しておいて、物語は疑問を解明する回想のかたちですすめられる。語りは3人称で客観的な叙述の形式をとっているが、作者の視点は完全に主人公である「みせのしゅじん」と一致している。

そしてずっと以前、そのレストランは「ペンギンハウス」という名前ではなかった。港も町もずっと小さく、周囲には店が一軒もなかった。その年の11月の最後の夜、閉店したレストランの主人は客の入りが悪いので、店をたたもうかなどと悩みながら、あとかたづけをしていた。そこへひとりのおじいさんが食事をさせてくれと言って入ってくる。主人は、今日はもう看板にしたから、明日にしてくれというが、おじいさんは空腹だからとにかく食事を出してほしい、主人がこれから賄いを作るのなら、いっしょに食べさせてほしい、と懇願する。主人もそれもそうだと考えて、ハンバーグとスープとサラダを作り、とつておきのワインを客のために開けて乾杯する。

食事の後、満足したようすのおじいさんは「これからは毎年この町に来ることになっている。来年もここで食事をしたい。今日泊まるホテルを紹介してくれないか」と頼む。主人は「来年にはこの店はもうやってないだろう。ホテルは近くにないから、2階にある自分の部屋に泊まってはどうか」と提案する。おじいさんは喜んで主人の厚意を受け入れ、「のりもの」を安全なところに置き、大きな荷物を持って部屋に入ってくる。

翌朝主人が目覚ますと、おじいさんの姿はなく、枕もとに「おもたくて、もちきれないので、にもつをひとつあずかってください。ちかいうちに、とりにきます。きょうから12月。メリークリスマス。」という書置きとペンギンのおきもののが残してあった。

主人はおじいさんがいつペンギンを取りに来るかわからないので、それを店のカウンターの上に置いた。その日から店にはたくさんのお客が来るようになり、主人はいつも忙しい思いをする。

そんなある晩、主人はたいそう疲れていたので、店をしまってから使った食器を洗う元気がなく、ベッドに横になって寝入ってしまった。夜中に物音がしたような気がして目が覚め、階下に降りてみると、汚れたまま流しに突っ込んでおいたはずの皿や器がきれいに磨かれてか

たづけられている。あたりには誰もいないし、それ以外に変わったようすもない。主人は不思議に思いながらまた2階にあがった。

数日たって同じことがまたあった。主人は子どもの頃、自分に夢中遊行の癖があって、昼間しようと思っていてしなかったことを夜中に無意識にしたことを思い出して、なんとなく不安な不愉快な感じを抱いていた。

3度目には解明のきっかけが見えた。つまり、起きて行くと、流しの水は出しっぱなしで、ペンギンが翼の先っぽに洗剤の泡をつけたまま不自然な姿勢で立っていたからである。主人はペンギンに「あの……。まさかとはおもうけど、おさらをあらってくれたのは、きみじゃないか。」(44ページ)と訊ねてみるが、ペンギンはしらばっくれて天井のほうを見ていて答えない。主人は諦めてその晩はそのまま寝床に戻った。

翌晩には、主人が初めから階下の暗闇の中に隠れていて、ペンギンが動き出すと明かりをつけ、かたづけもををしていたのがペンギンであることを確認する。ペンギンは少し怒っているようだったが、主人は謝る。ペンギンは「おじいさんに親切にしてくれたし、ぼくのこと大切に使ってくれたから、そのお礼に皿洗いをしたのだ」と説明する。おじいさんが何者かを訊かれると、「知っているけど言えない」という。店の主人は「だれにでも秘密はある」「知っていたって言えないことはある」と納得してそれ以上は訊ねない。おじいさんが12月25日に迎えに来るといっているので、主人はその日から25日までの1週間をペンギンといっしょに夜を過ごすことにする。

こうした会話のなかで、ペンギンは「自分はふつうの食事はしない。『やさしい心』を食べるとおなかいっぱいになるのだ」とか、おじいさんの正体についても話してくれる。このおじいさんの正体については、読者には明示されない。もちろん、冒頭で「サンタクロースのせき」という名前が出てきたり、大きな袋を持っているといった属性によって、読者には言われるまでもなく判るようになっていく。

12月25日、夜遅くおじいさんがやってくる。店の主人はいっしょに食事をした後で、ペンギンを譲ってもらえないかと持ちかける。おじいさんは次のように答える。

「あのペンギンは、ゆずるわけにはいかんのじゃ。なにしろ、わしのぼくじょうで、わしやトナカイたちのめんどろをみることができるのは、あのペンギンだけじゃからなあ。まさか、おまえさん。トナカイは、ほっきよくのほうで、ペンギンは、なんきよくのほうだから、すんでいるところがちがうはずだなんて、くだらないことは、いわんじやろうな。」(82ページ)

しかしおじいさんは店の主人の悲しそうな顔を見て、「毎年11月の最後の日からクリスマス次の日までならペンギンを預けてもいい」と約束してくれる。

こうして小さなレストランの名前は翌日から「ペンギンハウス」となり、毎年クリスマスのシーズンになると、奥のカウンターの上にペンギンのおきものが置かれるようになったのだ。最後の段落は斉藤らしい開かれたかたちになっている。

そうそう、おみせのたなにあるペンギンのかたちをした、小さなこしょういれは、おじいさんからのプレゼントです。

その、こしょういれのペンギンも、夜になると、なにかするのかって？

さあ、どうでしょうか。(92ページ)

2. 分析の視点

すでに言及したように、この作品は斉藤洋の初期のものに属する。筆者は斉藤の作品を主人公のタイプからおおまかにグループ分けしたことがあり、³それは、「ドイツもの」「動物もの」「少年もの」「怪談」の4種類であった。詳細は該当個所に譲りたい。ただし、最近では現代日本の少女が主人公のものもよく書かれているので、「少女もの」を加えて5グループにしたほうがよいかもしれない。さしあたり、2000年ごろまでの作品群については、4グループでだいたいの傾向は把握していると考えられる。斉藤作品は通例、市民的な個人を主人公とするので、主人公のタイプによる分類が有効なのである。

さて、それでは『ペンギンハウス』は、どこに位置するものであろうか。筆者は最初の三つのグループに共通する最大の特徴を「教養小説」としての性格に見ているのであるが、『ペンギンハウス』は、そうした性格をどの程度に持っているのか。また、かりに「教養小説」的でなく、「怪談」でもないとするば、どのような性格を持つと考えるべきなのか。

梗概から分かるように、主人公のタイプは「ドイツもの」「動物もの」「少年もの」のいずれにも属さない。語り口から「怪談」でないことは言うまでもない。ペンギンが登場するので、動物ものの要素を持っているとも見られるが、これは主人公ではない。この作品は斉藤の他の作品と少し違ったジャンルに属しているのではないか。「怪談」はジャンルの名称であるが、これにならって『ペンギンハウス』に限り、「メルヒェン」ないし「クリスマス・ストーリー」というジャンルを設定したほうが適切ではないか。(このように書くと、上述の分類自体に大きな欠陥があると思われるかもしれないが、4グループのどれにも属さない『ペンギンハウス』のような作品は斉藤においては稀である)

「おとぎ話」と見る理由は、ペンギンの行動がグリムの『子どもと家庭のための童話集』（いわゆる『グリム童話』。以下、この名称を用いる）の『小人たち』KHM39の第1話を連想させるからである。⁴時間と空間が規定されない語り口もおとぎ話にふさわしい。「むかしむかしあるところに」とほとんど同じような出だしであり、昔のことを語って、現在の不思議な状況を

説明するのも伝承によく見られる語りである。また、主人公がリューティのいう意味で孤立して、最初から最後までひとりきりでレストランを切り盛りしていることもおとぎ話らしい。お客が増えても、年月がたっても、レストランは経営を拡大したり人を雇ったりすることはなく、主人公の私生活にも変化が見られない。資本主義の経済学はここでは機能しない。主人公とその店とは、一貫して同じものとしてそこに存在している。これはたとえば、『いばら姫』のお城が百年の眠りからさめたとき、百年前とまったく同じ営みを続けたことと似通っていないだろうか。

グリム童話との比較は次章に委ねるが、伝統的なおとぎ話の素材である「超自然的援助者」と主人公の幸福とに関して、現代日本の作家がどのように理解したのかを考察してみたい。

クリスマス・ストーリーとしての性格は表題からも明白であり、とくに論証を要しないだろう。『ペンギンハウス』のこの側面については、斉藤自身が自伝的要素のある最近の著作『童話作家はいかが』で詳しく語っている。⁵それによれば、クリスマス・ストーリーが書店に並び始める晩秋、夫人に「あなたのクリスマス・ストーリーがないから書きなさい」と言われ、そのころ構想していたペンギンの登場人物を重ね合わせて、ある夕食後の4時間（19時から23時まで）に全編を書き上げたというのである。私事ながら、この話は『童話作家はいかが』という本が出版される以前に、斉藤自身から筆者も聞いていて、インスピレーションというのはそういうものか、作家はそういうふうに仕事をするのか、と感銘を受けた記憶がある。

このように『ペンギンハウス』は、最初からクリスマス・ストーリーとして構想されたものなので、この点についてはこれ以上触れる必要はないだろう。キリスト教の伝統をもつヨーロッパの「クリスマス・ストーリー」がどのような精神的・宗教的内実をもち、斉藤の作品がそれとどう関わるかといった厳密な議論をここでする必要はないであろう。『ペンギンハウス』は、日本的なクリスマスの雰囲気の中で書かれたクリスマス・ストーリーであり、本家のクリスマスとの比較はあまり生産的な議論にならないと思われるからである。

以上のような立場から、『グリム童話』の「小人の靴屋」の話と『ペンギンハウス』を比較分析して、「小人」と「ペンギン」という援助者の存在のありよう、および主人公の対応の違いを調べ、それによっておとぎ話から現代日本のひとつの童話が受容したものと付加したものと、本質的な世界観の差といったものを明らかにしたいと考える。したがって小論は「おとぎ話の現在」と銘打っていても、ひとつの例をとりあげたに過ぎず、言わば事例研究であることをお断りしておきたい。

3. 『グリム童話』の「小人の靴屋」について

KHM36の第一話は、地味ながらよく知られた話である。

冒頭は次のように始まっている。

むかしあるところに一人の靴屋がいましたが、なにも悪いことをしないのにたいそう貧乏になってしまい、とうとう一足の靴を作る革しか手元に残らないことになりました。そこで靴屋は夜革を裁っておき、翌朝仕事にかかることにしました。そして、彼の良心にはなんのやましいこともなかったので、落ち着いた気持ちで寝床に横になり、神様にお祈りをして眠ってしまいました。⁶

翌朝起きて仕事場を覗いた靴屋はたいそう驚く。それは、昨夜は裁ったばかりの革だったものが、りっぱな靴にしあげられていたからだった。仕事ぶりには非のうちどころがなかったから、すぐに買い手がついて、それで2足分の革が買えた。その晩も靴屋はその革を裁ってから寝た。翌朝には2足の靴ができあがっていて、こんどは4足分の革が買えた。そして4足の靴が夜の間仕上げられていた。こんなふうにして靴屋はしだいしだいに裕福になっていった。

さてある晩、クリスマスも近づいた頃、靴屋はまた革を裁ってから、妻にこう言ったことがあった。「今晚は起きていて、誰がわれわれにこんな親切をしてくれるのか見てみたらどうだろうね」⁷

妻も賛成して、二人は夜明かりをつけておいて部屋の隅に吊り下げた衣服の後ろに身を隠した。真夜中になったとき、可愛らしいはだかの小人が二人入ってきて、仕事を始め、全部の靴を仕上げるまで手を休めなかった。終ると二人はまた飛び出していった。

これを見届けた妻は、「あの人たちはわたしたちをお金持ちにしてくれた。それなのに、自分のはだかで走り回っている。きっと寒いに違いない。私がシャツと上着とチョッキとズボンとを縫い、靴下を編んであげるから、あなたは靴を作っておあげなさい」と提案する。夫もこれに賛成して、さっそくその晩、できあがった衣類と靴一そろいをいつもの仕事机の上に並べておき、身を隠してようすを見ていた。真夜中にやってきた二人の小人は、革の代わりにきれいな衣装が置いてあるのを見て、初めは不思議そうだったが、やがて非常に喜んだ。そして衣服を身に着けると、歌い踊りながらドアの外へ出て行って、それからは二度と姿を見せなかった。靴屋は生涯恵まれて、しようと思ったことはなにによらずうまくいった。

以上が『小人の靴屋』の梗概である。『ペンギンハウス』とのモチーフ上の類似点を箇条書きにしてみよう。

1. クリスマスが近い季節
2. 夜のうちに主人公の仕事をしておいてくれる存在が出現する
3. 主人公は隠れて援助者の正体を突き止める

4. 援助者は正体を知られても怒らない。むしろ主人公から親切にされることを喜ぶ。

この第4点は注目に値する。それは、おとぎ話ではたいてい正体を知られた超自然的援助者が破滅するからである。有名な例は、『グリム童話』のKHM55 Rumpelstilzchenや、日本の『大工と鬼六』であり、魔物が主人公に代わって不可能な仕事をやりとげてくれる。その代償として主人公の子どもなどを要求するが、主人公の抵抗に会うと「自分の名前が分かったら、許してやる」という。主人公が魔物の名前を言うと、魔物はわが身を二つに引き裂いて死ぬ。名前を知られることは、魔物の本質を見破られることを示し、人間に敗北したことを意味するのである。

また、『ペンギンハウス』の本文で言及されているが、『鶴の恩返し』のような話もある。恩返しにきた鶴が正体を見られるともう人間界にいることができなくなって去っていく。『ペンギンハウス』で、主人とペンギンが会話を始めた晩に次のようなやりとりがある。

だまって見つめあっているうち、みせのしゅじんは、だんだんしんばいになってきました。つるのおんがえしの話を、おもいだしたからです。

「まさか、きみ。ぼくが見ちゃったからって、もうこのみせをでていくなんて、いわないだろうね。」

「でていく？ そういうことはゆるされていないし、そういうきまりもない。」(60ページ)

店の主人が『鶴の恩返し』の話を思い出した、というのは、作者の斉藤自身が、おとぎ話では正体を見られた援助者は人間界を去る、という暗黙の約束を認識していたことを示している。

『小人の靴屋』は、グリム童話のなかでもとりわけ後味のよい物語である。それはおとぎ話によくある、悪役がいないことによるのだろう。おとぎ話では悪人への過酷な罰は善人がさらに顕彰されるためであるとして肯定されている。昨今のグリム童話の冷酷さや残酷さを強調する本の流行はこのあたりに根拠を持っているのかもしれないが、悪人ぬきで善人だけが報われる話があれば、それに越したことはないだろう。『小人の靴屋』は数少ないその例のひとつである。そしてこの後味のよさが斉藤洋の作品の世界につながる要素となっている。

しかしながら、正体を知られた超自然的援助者が人間界から去る、という原則は『小人の靴屋』にも貫かれている。その去り方が平和的で、主人公の厚意への感謝が感じられるところが違うだけである。この平和的であるということは、1. に指摘した「クリスマス・ストーリー」的な性格と関係しているかもしれない。そして、正体を知られたといっても、靴屋夫婦は姿を隠したままであって、直接には出会っていないのである。

これにたいして、『ペンギンハウス』のペンギンは、正体を知られても姿を消す必要はない。

それに援助の内容もはなはだささやかである。Rumpelstilzchen や『大工と鬼六』では、人間業でできないことを魔物がやりとげるし、『小人の靴屋』でも小人が作った靴だからこそ右から左へと売れていき、靴屋を裕福にしてくれたと考えられる。人間には不可能なことをしてくれたのである。それに比べて、流しに重ねてあった汚れた皿を洗っておく、というのは、いかにも日常的でささやかな手助けであり、店の主人の実存を賭けた問題の解決などではない。また、ペンギンが仕事にかかろうとするとき、店の主人と直接顔を合わせることである。

この点に、おとぎ話と現代の童話との本質的な違いがひとつ表れていると言えないだろうか。すなわち、現代にあつては超自然的援助者の援助そのものはもはや期待されていないのである。おそらく物質的に恵まれた20世紀末の日本においては、裕福になることが究極の目的ではなくなっている。ペンギンの存在理由は別のところにある。だから、ペンギンと主人が顔を合わせても不都合が起こらないのだ。

おとぎ話は精神的な価値を目に見える形で表現しようとする。美しい心の持ち主は見た目も美しく、邪悪な心をもつ人物は醜い。同様に最終的に裕福になることは善であることの証である。『小人の靴屋』は、おとぎ話のこうした特性をよく表現している。しかし、現代のおとぎ話『ペンギンハウス』ではどうであろうか。

冒頭で、客が一日に三人しか来ないので、店じまいを考えていた主人であるが、「おじいさん」を泊めてあげた翌日からお客がたくさん来るようになる。それは、港の工事が始まって、そこで働く人たちが増えたからだと説明されている（26ページ）。

ペンギンと親しくなつて、いろいろな話をするようになった主人は、おじいさんがサンタクロースであることも打ち明けられる（読者には明示されていないが、分かるようになっている）。主人はびっくりして、次のような反応を示す。

「そうすると、ぼくのレストランに、おきゃくさんがたくさんくるようになったのも、あのおじいさんの力かな。」

みせのしゅじんのことばに、ペンギンは、くびをふりました。

「あのおじいさんは、そういうプレゼントはしない。しょうばいっていうのは、それまでひまだったのが、とつぜん、いそがしくなることがあるんだ。いっしょうけんめいやつていればね。みなとの工事で、人があつまりだしたっていうことも、あるしね。（後略）」

（72ページ）

店の主人はサンタクロースと聞くと、ふつうわれわれがそうであるように、いわば形而下的な贈りものを連想して、レストランの経営が順調になったことをそのおかげだと考える。しかし、ペンギンはそれを否定して、「そういうプレゼントはしない」と断言する。自分で工夫して努力しなければ仕事はうまくいかないということである。現代のサンタクロースの贈りものは、

物質的な価値ではない。その証拠に、レストランに客が増えても、主人は相変わらずひとりで店を切り盛りしており、家族すらも持たない。繁盛することによって得られた物質的な豊かさには、まったく言及されていないのである。ここでは、超自然的援助者が物質的援助をしてもあまり意味がないように見える。唯一の意味は、主人が店を閉めずに仕事を続けていく勇気を得たことであろう。

おとぎ話の超自然的援助者は、人間をはるかに超える魔力を持つからこそ、正体を知られるとこの世にいたることができなくなった。また、人間には援助者と面と向かって顔を合わせないようにする配慮が必要だった。『ペンギンハウス』のペンギンはそうした魔力を持たないからこそ、正体を知られてもそのままいつづけることができた。そして、互いの「やさしい心」を理解しうる友人としてその後の人生を生きていく。現代における最大の贈りものは「やさしい心」なのであり、クリスマス・ストーリーとしての『ペンギンハウス』のメッセージはこの点にこそあるのである。

4. おとぎ話の現在

このように見てくると、『ペンギンハウス』という作品は悪人のいない世界、まったくの「無疵の世界」eine heile Weltを描いているように思われる。斉藤洋の作品はたいていの場合、明るくさわやかな読後感を残すのだが、『ペンギンハウス』も例外ではない。むしろ、こうしたほのぼのとした印象を与える点において、彼の作品のなかでも代表的なものと言ってよい。

それでは『ペンギンハウス』の世界はほんとうに無疵なのだろうか。この点については、以前に『ドロセルマイヤーの人形劇場』を論じたときに触れたのだが、今回もこの問題を取り上げなければ、作品をほんとうに読んだことにはならないだろう。

「無疵ではない」個所への手がかりのひとつは、夜中のうちに皿がきれいになっていたことを初めて発見したときの主人公の反応にある。おとぎ話ならば、主人公は勞せずして難題が解決されたのだから、喜ぶところである。『小人の靴屋』には「喜ぶ」という言葉こそ見られないが、事実上そうであったらうと理解できる表現になっていた。

ところが『ペンギンハウス』の主人は、自分が子どもの頃夢中遊行をするくせがあったのを思い出して、「気がおもく」なる。

そうだ。ねむっているうちに、まどガラスをみがいていたこともあったから、こんやも、しらないで、おさらをあらってしまったんだ。

もう、あのくせは、なおったとおもっていたのに。(36ページ)

すなわち、主人は自分のなかに自分が制御しきれない力の存在を感じているのだ。自己の中

の他者、意識下に眠っていて予期しないときにうごめき出す奇怪な力の存在、目に見える世界だけが世界ではないという認識、そういった世界との不調和感が主人の中にある。

さらに第二の手がかりとして、この「世界との不調和感」と関係するが、ペンギンが「知っているとも言えないことがある」とおじいさんの正体を明かしたがいなかったとき、主人は「だれにでもひみつはある」と肯定する。

「しっていたって、いえないこともあるさ。」(中略)

「それも、そうだね。だれにでも、ひみつはあるからなあ。」

みせのしゅじんは、それいじょうききませんでした。だれにでも、人にしられたくないことはあるんだし。(58-60ページ)

ここで「ひみつ」ないし「人にしられたくないこと」と言われるのが何を指すかは不明であるが、物語の中でのみ考えるなら「子どもの頃夢中遊行の癖があったこと」を意味しているとの解釈もできる。ペンギンが沈黙していようとするのは、他者との約束を守る倫理的な態度なのだが、主人は「だれにでも、ひみつはある」という表現で、自分の中の不調和感ないし不安感を口にしてしているのである。

齊藤洋の作品に共通する登場人物の「優しさ」は、この「だれにでも、人にしられたくないことはある」という認識を基盤にしている。だれもが存在の不安を抱えながら、それでもせいっぱい日常生活を生きている、世界の表皮の下には、数限りない悩みや苦しみが渦巻いている、と想像するからこそ、登場人物たちは出会った人間や動物に優しいまなざしを注ぐことができるのである。齊藤作品においては、そうした悩みや苦しみが克明に描写されることはなく、暗示的にさらりと書かれるだけであるが、人物のこぼのはしばしに、苦しむ人への思いやりや優しさが表れている。

グリムの『小人の靴屋』が、堅実に富を築き貧しい人々を助けることが人間の幸福であるというメッセージを発しているとするれば、『ペンギンハウス』は、友情と優しさこそが現代の人々に必要な価値である、と言っているのではなからうか。現代のおとぎ話は、物質的豊かさと慈善で精神の豊かさを暗示するというグリムのクリスマス物語を超えて、物質的にはほとんど禁欲的といってよいような質素さの中で精神的な豊かさを訴えているのである。

(完)

注

- 1 拙稿：「齊藤洋『ドローセルマイヤーの人形劇場』におけるE.T.A.ホフマン受容」人文研究 大阪市立大学文学部紀要 第51巻 第8分冊 1999年 127-143ページ

- 1 拙稿：「テオバルトはバルチファルか — 齊藤洋『テオバルトの騎士道入門』をめぐって—」人文研究 大阪市立大学文学部紀要 第52巻 第11分冊 2000年 75-91ページ
- 2 齊藤洋『ペンギンハウスのメリークリスマス』 講談社 1997年10月24日第10刷 2ページ。なお、本書からの引用については、これ以後本文の該当個所の末尾にページ数を付す。また、本書ではすべての漢字に「るび」が付されているが、引用に際しては「るび」は省略する。
- 3 前掲拙稿：「テオバルトはバルチファルか— 齊藤洋『テオバルトの騎士道入門』をめぐって—」75-76ページ
- 4 Brüder Grimm: *Kinder-und Hausmärchen*. Angabe letzter Hand mit den Originalanmerkungen der Brüder Grimm. Bd. 1.Hrsg. Von Heinz Rölleke. Stuttgart 1984. S.215-217. この話は *Die Wichtelmänner* の表題のもとに3話が集められていて、個別のタイトルはないのであるが、第1話は「小人の靴屋」と仮に名づけておく。
- 5 齊藤洋『童話作家はいかが』講談社 2002年5月10日第1刷 135-145ページ。第3章「書くということ」の3「話を思いつくケース2」が『ペンギンハウスのメリークリスマス』成立のエピソードにあてられている。
- 6 Brüder Grimm: a.a.O.,S.215
- 7 Brüder Grimm: a.a.O.,S.216